

春の風物詩といえば、入社式・入学式。鎌倉などの古刹のあるところでは、御開帳も風物詩といえます。魚や野菜の産地では、旬の食物なども、春の訪れを知らせる大切なものと言えます。しかし、日本人にとってはやっぱり桜です。

寺田寅彦のエッセイに「春六題」というのがあります。寺田寅彦は科学者の立場から

「春が来ると自然の生物界が急ににぎやかになる。いろいろの花が咲いたりいろいろの虫の卵が孵化（ふか）する。気候学者はこういう現象の起こった時日を歳々に記録している。そのような記録は農業その他に参考になる。

たとえばある庭のある桜の開花する日を調べてみると、もちろん特別な年もあるが概ねはある四五日ぐらいの範囲内にあるのが通例である。これはなんでもないうでずいぶん不思議な事である。開花当時の気温を調べてみても必ずしも一定していない。無論その間ぎわの数日の気温の高低はかなりの影響をもつには相違ないが、それにしてもこの現象を決定する因子はその瞬間の気象要素のみではなくて、遠くさかのぼれば長い冬の間から初春へかけて、一見活動の中止しているように見える植物の内部に行なわれていた変化の積算したものが発現するものと考えられる。」

と統計的に書いています。

今年の桜は、以上の統計に合致していたでしょうか。何だか少し例年と違う動きをしているような気がします。

東京の桜の開花は平年より一週間早く、昨年より一日早い3月21日でした。しかし、桜の開花後寒い日が続いたためか、満開は、ほぼ平年と同じ、2日早いだけの4月3日で、昨年よりは一週間も遅れました。そのため、昨年以上に寒い夜桜見物や宴会をした人が多かったのではないかと思います。

最近では、開花してから四五日で満開というのが平均的でしたが、埼玉県のをさいたま市では3月22日に開花したにもかかわらず、4月4日になっても満開宣言は出されていません。

まさか桜も

「そこへ行くと人間などはだらしのないものである。仕事が忙しかったり、つい病気したりしていると、いつのまにか柳が芽を吹いたり、桜のつぼみのふくらむの知らないでいて、急に気がついて驚く事がある。

うっかりしている間に学年試験が目の前に来ていたり、借金の返済期限がさし迫っていたりする。」

のように、だらしのないものになってしまったのでしょうか。

それとも、

「眠っているような植物の細胞の内部に、ひそかにしかし確実に進行している春の準備を

考えるとなんだか恐ろしいような気もする。」

という行がありますが、近年の温暖化が眠っているような植物の細胞の内部に、ひそかに、しかも、確実に進行している春の準備を狂わせているのではないかと懸念します。

まさか、稲も桜に倣って、穂が早く出たにも関わらず、米が実るのが遅れることはないでしょうね。1993年（平成5年）や2003年（平成15年）の冷夏のように、8月になっても梅雨前線が日本列島に停滞し、豪雨災害と低温が続き、「米騒動」や野菜が不足し、年末にかけては例年の2倍を越える高騰するようなことは、取り越し苦労だと思いますが。とにかく、この桜の開花、満開が異常気象の前触れになることだけは御免蒙りたいと思います。

でも、春が来ると何となく、心も身体もウキウキしてきますね。

< 寺田寅彦（1878-1935） >

随筆家、地球物理学者。東京市麹町区（現在の千代田区）生まれ。東京帝国大学卒。航空研究所、理化学研究所、地震研究所、東京帝国大学（教授）などに所属、大正12年（1923）45才の時、関東大震災に遭遇し、火災旋風などの調査に従事する。



「天災は忘れた頃に来る」という言葉を言い出したのは寺田寅彦であるといわれている。漱石の門下生でもあり、吉村冬彦の筆名で数多くの随筆を書いている。

作品に『漫画と科学』『科学と文学』『西鶴と科学』『珈琲哲学序説』『神話と地球物理学』などがある。

< 千鳥ヶ淵の桜 >

皇居のお堀沿いに約700m続く遊歩道があり、春になるとソメイヨシノ、ヤマザクラ、オオカンザクラなど約260本のサクラが花開き、淡いピンク色に染まります。また、堀の水面に映る桜並木の風景がひと際美しく、毎年3月下旬～4月上旬には、幻想的なムードが漂うライトアップも行われます。

千鳥ヶ淵は江戸開府後の江戸城拡張の際、局沢川と呼ばれていた川を半蔵門と田安門の土橋で塞ぎ止めて造られたお堀で、代官町通りを境に接する半蔵濠とはかつて繋がっていましたが、1900年（明治33年）に道路建設のため埋め立てられ別々のお堀となってしまいました。また、千鳥ヶ淵緑道を挟んだ先には千鳥ヶ淵戦没者墓苑が造られ、第二次世界大戦の折に海外で死亡した身元不明の日本人の遺骨が安置されています。



### < 段葛の桜 >

鎌倉の桜の名所に、段葛の桜があります。若宮大路の二の鳥居から三の鳥居までの間は、歩行者専用道路で桜並木となっていますが、過っては松並木で、現在の桜並木がつくられたのは大正時代です。

段葛は、頼朝の夫人・北条政子が、二代将軍・源頼家を懐妊した時、安産を祈って、養和2年(1182)3月、北条時政以下の御家人と共に、土石を運んで築いたということだそうです。道の中央に段2檀を築き、緑石を兼ねる葛石を並べて一段と高くしてあり、段葛の名はこの段の葛石にちなんでつけられています。

道は、鶴岡八幡宮に向かって近づくほどに狭くなる遠近法を利用して、軍事上長い道と錯覚させるためと云われています。

段葛の造られた当時は、由比ガ浜近くの一の鳥居までありましたが、今は削られ、鎌倉駅近くの二の鳥居から鶴岡八幡宮近くの三の鳥居までしか残っていません。



### 春秋：「逆風下の入社式」(4/2)

きのうの本紙夕刊に「逆風下の入社式、トップ訓示、奮起促す」と見出しの付いた記事がある。「自らの未来を切り開く認識と気概をもってほしい」「変革できる者だけが生き残れる」。社長たちが、それぞれの表現で危機感を訴える。

人生の序章を終え、本論に入ろうとする若者たちの耳にどう響いたか。心配なのは危機感と悲観との混同である。マルクス主義の残像なのか、悲観論こそ知的 だとする深層心理が日本の知識人にはある。特に不況下は、その傾向が強い。学舎(まなびや)が知的空間だとすれば、巢立ったばかりの若人らも悲観論に傾きやすい。

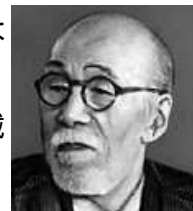
だからいま高村光太郎の詩を彼らとともに味わいたい。「僕の前に道はない/僕の後ろに道は出来る」で始まる、有名な「道程」では「この遠い道程のため」が繰り返される。道は遠い。でも、暗くはない。「牛」もいい。「牛は平凡な大地を行く/やくざな架空の地面にだまされない」。愚直で明るい生を謳(うた)う。

一方で「智恵子抄」は悲しく美しい。妻、智恵子との死別があったからだろうか、暖かくなると咲く、黄色い連翹(れんぎょう)の花を光太郎は愛した。きょうは光太郎の命日。連翹忌と呼ぶ。「連翹の黄は近づいてみたき色」(稲畑汀子)。明るい春の情景だ。冬は必ず終わる。若者たちとだけでなく、世界中でかみしめたい。

#### <高村光太郎(1883-1956)>

彫刻家、評論家、詩人。東京府下谷区(現・東京都台東区)出身。本名は光太郎(みつたろう)。

本職は彫刻家・画家。『智恵子抄』等の詩集が有名になり教科書にも掲載されるようになったため、詩人として認識されることも多い。評論や随筆、短歌の著作もある。



東京美術学校(現・東京藝術大学)彫刻科に入学。文学にも関心を寄せ、与謝野鉄幹の新詩社に入り、『明星』に留学に出て、ニューヨークに1年間、その後ロンドンに1年間、パリに9ヶ月滞在する。

1909年に帰国。旧態依然とした日本の美術界に不満を持ち、パンの会に参加し、『スバル』などに美術批評を寄せた。「緑色の太陽」(1910年)は芸術の自由を宣言した評論である。

#### <稲畑汀子(1931-)>

俳人。神奈川県横浜市生れ。小林聖心女子学院英語専攻科中退。小学生の頃から、祖父高浜虚子・父高浜年尾に俳句を学んだ。

1935年、鎌倉から芦屋に転居。1965年「ホトトギス」同人。1976年第一句集『汀子句集』刊行。1977年「ホトトギス」雑詠選者、父高浜年尾の死去により主宰を継承。



朝日俳壇選者、NHK俳壇の講師・選者を歴任、1987年、日本伝統俳句協会を設立。2000

年、虚子記念文学館を芦屋に開館。

句集に『汀子句集』『汀子第二句集』『汀子第三句集』『障子明り』『さゆらぎ』など。

### 天声人語：「開帳は春の風物詩」(4/1)

江戸時代、ありがたい仏像を遠方で披露する出開帳(でがいちょう)が盛んに催された。浄財を募るため、地方の名刹(めいさつ)が江戸に持ち込む例が多かったという。時候が上向く頃の風物らしく、開帳は春の季語である。

桜の下を抜け、平成の出開帳を拝んできた。上野の東京国立博物館で始まった「阿修羅(あしゅら)展」だ。奈良・興福寺の創建1300年を記念し、寺宝の数々が並ぶ(6月7日まで)。国宝阿修羅像の「上京」は57年ぶり2回目という。

三つの赤い顔に腕が6本。異形の守護神阿修羅は、インドの神々でも暴れん坊で知られ、仏教に取り込まれる前は布教を妨げる外道だった。それが説法を聞くうちに、他の悪神から釈迦(しゃか)を守る役回りとなる。

阿修羅像は博物館の暗がりに浮かんでいた。怒りや荒々しさはなく、きゃしゃな美少年か女性のように。かつて彫刻家の籾内佐斗司(さとし)さんが、早世の女優夏目雅子さんに重ねた顔だ。善神に転じても過去を悔いているのか、寄せた眉根は戦いの憂いを湛(たた)えてりりしい。

作家の堀辰雄も戦前、その「切なさ」に魅入られた。「何処(どこ)か遥(はる)かなどころを、何かをこらえているような表情で、一心になって見入っている……こういう目(まな)ざしをして、何をみつめよとわれわれに示しているのだろう」(随筆集『大和路』)。

涙をためたかに見えるまなざしに、間近で射られる幸せ。出開帳ならではの特典だろう。展示ケースはなく八方から拝観できる。阿修羅との間にあるのは、天平の時がほのかに薫る空気だけだ。幾多の戦火を生き延びてくれた奇跡に、手を合わせた。

#### < 籾内佐斗司 (1953-) >

彫刻家。大阪市出身。東京芸術大学大学院教授。東京芸術大学美術学部彫刻科卒業。仏像などの古美術の古典技法と、その修復技術を研究、新薬師寺地蔵菩薩立像(奈良市)、平林寺十六羅漢像(新座市)などで東京芸術大学が中心となって行った、保存修復に参加。



1987年、彫刻家として活動を開始。2004年、東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復(彫刻)教授に就任。

著書に『籾内佐斗司作品集・大博物誌』『開運「楽観道」のすすめ』『てのひら般若心経シリーズ「開運招福 籾内佐斗司の般若心経」』など。

#### < 夏目雅子 (1957-1985) >

女優。本名：西山雅子(にしやま まさこ、旧姓：小達(おだて))。東京都港区六本木生まれ。東京女学館短期大学中退。其田事務所所属。趣味は毛糸の編物、絵(デッサン)、琴、古い食器収集、俳句(東京俳句倶楽部所属、俳号は海童)、生け花(草月流)。



急性骨髄性白血病と診断されたが、夏目本人には「極度の貧血」とだけ告げ、本当の病名を伏せていた。夏目の入院と共に夫の伊集院は、仕事をすべて辞めて彼女が亡くなるまで母親らと共に看病にあたった。

< 堀辰雄 (1904- 1953) >

作家。東京都出身。東京帝国大学卒。

高校在学中に室生犀星や芥川龍之介の知遇を得る。

1926年に中野重治らと同人誌『驢馬』を創刊。1930年に『聖家族』で文壇デビュー。



折口信夫から日本の古典文学の手ほどきを受け、王朝文学に題材を得た『かげろふの日記』のような作品や、『大和路・信濃路』(1943年)のような随想的文章、また、現代の女性の姿を描くことにも挑戦し、『菜穂子』(1941年)のような、既婚女性の家庭の中での自立を描く作品にも才能を発揮した。

作品に『美しい村』『風立ちぬ』『かげろふの日記』『曠野』など。

### 編集手帳：「食べ物の旬」(3/30)

食べ物の旬は、季節を先取りする「走り」や、よく出回る「出盛り期」を指す。春を迎えた今ごろは、新タケノコに続いて初鰹（はつがつお）がまもなくだ。旬の味を楽しみにしている方は多いだろう。

対照的なのが「一年中が旬」である。天候に左右されず、季節にも関係ない。太陽光のほか、蛍光灯や発光ダイオード（LED）などを使って、湿度や温度、養分をコンピューターで制御する。計画生産の可能な“ハイテク植物工場”が増えている。

カゴメは、契約菜園を含めた全国30か所のガラスハウスで、年1万トンを超える量のトマトを生産し、生食用に出荷する。「エコ作」というブランドで販売されているのはJFEライフのレタスやサラダ菜だ。

南極の昭和基地では、ベンチャー企業製のプラントで越冬隊員が南極産の新鮮なレタスを味わった。政府はこうした工場を「農商工連携」の有望株と考え、普及に弾みをつけようと狙う。

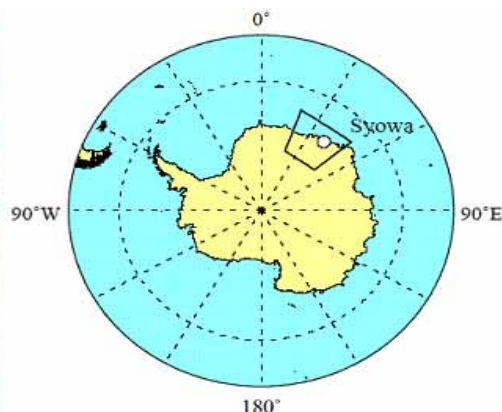
日本の農業は生産性が低いといわれるが、ハイテク工場では20期作以上ができる緑野菜も夢ではない。薄れゆく旬は少々さみしくもあるが、旬を感じさせない農業がこれからの旬らしい。

#### <昭和基地>

南極圏内の東オングル島にある日本の観測基地。南緯69度00分22秒、東経39度35分24秒、標高29.18m。基地の名称は建設された時代の元号「昭和」にちなむ。所管は文部科学省と極地研究所。

昭和基地は、天体・気象・地球科学・生物学の観測を行う施設であり、施設は53の棟から成る。基地から1000キロ離れた南極大陸内にドームふじ基地がある。

隊員は約60名で、そのうち約40名が越冬する。翌年度の隊が来た観測船で前年の越冬隊が帰国するため、基地には常に人がいることになる。2007年11月現在、基地に残っているのは48次越冬隊とオブザーバーである。1次越冬隊の際に有名になった樺太犬など犬ぞり用の犬は、その後、環境保護に関する南極条約議定書（付属書 第四条）により生きた動物や植物等の南極への持ち込みが禁止されたため、現在はいない。



### 余録：「花見の幸福」(4/3)

芭蕉が上野の花見に行った。大勢が幕を張りめぐらし、さまざまな音曲や小唄がにぎやかである。かたわらの松の陰にようやく場所を見つけて - - 「四つごきのそろはぬ花見心哉（ごころかな）。四御器（よつごき）という旅僧の用いる粗末な食器すらそろわない貧しい花見をしたという。

周囲の騒ぎをよそに、つつましい芭蕉一行の花見が思い浮かぶ。だが同行した一人は、その様子を「瓢箪（ひょうたん）の底をたたき……毛氈（もうせん）の上の腹鞆（はらづつみ）も狸（たぬき）まけぬ酔心、翁（おう）の野々宮、熊坂も出る程の大繁昌（はんじょう）にて、少々は紅裏も見へ」と書いている。

ヒョウタンをたたいて大騒ぎの酔態で、芭蕉も謡曲を歌うか舞うかの大盛り上がりだった。この逸話を紹介している白幡洋三郎さんの「花見と桜」（PHP新書）は、「紅裏も見へ」とあるのを見ると女性も座に呼んだのだろうと推測する。

いやはや貧窮の芭蕉もどんちゃん騒ぎした日本人の花見だ。庭園史家の白幡さんは、花見とは「群桜」「飲食」「群集」から成る世界に類のない民衆文化で、身分や貧富を超えた群集の「共同の幸福」の場だと説く。なるほど俳聖も巻き込む大はしゃぎこそ花見の本領なのらしい。

先月21日にソメイヨシノの開花宣言が出た後、ほころんだつぼみが思わぬ冷え込みで固まっていた東京地方である。花見を待つ向きにはまだるっこい2週間となってしまったが、気温も上向いてようやく「群桜」が楽しめそうなこの週末だ。

あとは「飲食」と「群集」があれば花見となる。景気や雇用をめぐるつらい話ばかり耳に入る4月だが、仮に松の陰の粗末な宴だったとしても集う者みなが同じ幸福で心を満たす花見である。喜びの春を分かち合おう。

< 白幡洋三郎（1949-） >

国際日本文化研究センター教授。専門は、庭園史、産業技術史。庭園、都市公園などを研究対象とする。

大阪府豊中市生まれ。1980年、京都大学院農学研究科満期退学、農学博士。



1975年から2年間、西ドイツのハノーファー工科大学に留学、1980年、京大農学部助教授、1987年、日文研助教授、のち教授。1994年、『プラントハンター』で毎日出版文化賞奨励賞受賞。

著書に『江戸の大名庭園 饗宴のための装置』『プラントハンター ヨーロッパの植物熱と日本』『近代都市公園史の研究 欧化の系譜』など。